
赤の破壊者

逃亡日記

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤の破壊者

【Nコード】

N4316Y

【作者名】

逃亡日記

【あらすじ】

真冬の冬。そんな雪が降っているある日。
血まみれの少年が公園で雪をかぶって倒れていた。
そんな少年を一人の男が少年を…。

登場人物

”死にたい”ただ…それだけが、僕の生きている理由だと思った。

白夜^{びやくや} 詩雅野^{しがの}

不明（見た目、17歳か18歳くらい）の男の子。
生意気だけど暗くて無口で笑わない。

ヴェンパイア族の生き残り。

いつも命を狙われている。

人の未来を見ることが出来る。

血は吸わない。いつも”死にたい”と言う気持ちを持っている。

時無詩^{ときなし} 静^{しずか}

18歳の男。

無愛想で無口で冷たい。

他人には無愛想であまり笑わなくて無口だが、
なぜか、詩雅野だけには結構生意気で優しい。

詩雅野と一緒に住んでいる。

詩雅野がヴァンパイアとは知らない。

とてつもなく、馬鹿力な能力を持っている。

#1 雪どけのヴァンパイア

”死にたい”ただ…それだけが、僕の生きている理由だと思った。

バキユンッ！

「ハア…ハア…。」

「待て！この化け物が！」

「ハア…ハア…。」

「チッ…見失ったか。」

バシャッ…タッ

一人の血だらけの少年が歩いていた。

誰も居ない、公園。

雪が積もって、雪が降っていた。

そして、血を流して、木にもたれる少年が居た。

「ハア…ハア…死ねる…。」

バタンッ

死ねるなら…一人で静かに死にたい…。

『生きて！詩雅野！』

ハッ！

「?!…。」

少年は包帯を巻かれてベッドに寝かされていた。

「…どこだ…ここは?…。」

ガラッ

誰かが病室に入ってきた。

「起きたか？」

「…人間か…なんのようだ？」

「はあ？」

「僕を殺しに来た…?!」

「何で、俺がお前を殺しに来るんだ？」

「マフラー…はどこだ！」

少年は探す。

「これか？」

「あつ！」

男が持っていた、しましまのマフラーを少年は取った。

「お前…何者なんだ？」

「はあ？…意味不明なんだが…。」

ガラッ！

「おはよー！静！」ニコッ

「麗!？」

タッ！ガラッ！

「あつおい！」

少年は窓から飛び降りた。

「おい！待て！」

「えっ？静？」

部屋には、女の子一人になった。

「静あああああああ！………!」

「いたぞ！」

「!?!? 見えない!?!?。」

「待て！」

バキューンッ!!

シュッ！

銃の弾が背中にかすった。

「！？…クッ…。」

「化け物のくせに、傷はすぐに治らないようだな！」

「…殺したければ、殺せばいい。」

「何？」

「別に、こんな世界にいても、自由なんてない。

一生、お前等に追い続けられないといけないんだろう？」

「ああ…そうだ。なら、もう殺してやるよ！」

「……。」

「チッ。」

「！？…。」

少年はさっきの男と共に消えた。

「何！？」

「！？…お前…。」

「何してんだよ！死ぬ気か？」

「人間のお前に何が分かる。」

グイッ！

「？！…。」

「いいから来い！」

男は少年の手をつかんで、一つの家（？）に向かった。

ガタンッ

ドアが開いた。

そして、一人の女の人が出てきた。

「初めまして、未来が見える能力を持っている白夜詩雅野君」ニッコッ

「！？…。」

「で、いきなりだけど、詩雅野君。ここで死ぬか、ここで生きて私の手伝いをするか選んで？」ニコッ

「…そんなの…」

「生きてここにいるに決まってる。」

「！？…なっ！」

男が詩雅野の代わり言った。

「そっか、私はこの家の主の董咲霏。すみれさきみぞれよろしくね」ニコッ

「ちなみに、俺は、時無詩静。よろしくな！詩雅野」ニコッ
「…。」

不幸だな…僕は…。

「じゃあ、静が詩雅野君の面倒見てね。それと、学校も行ってね」

ニコッ

「……。」

「返事は？詩雅野君？」

「はい…。」

「って、事は同じ部屋だな。俺等。」

「！？…最悪…」ボソッ

#2 同居・学校

お前は、必要ない！存在の価値すらない存在だ！お前など存在しても誰も喜ばない！

ハッ！

「！？…ハア…ハア…。」

詩雅野は少し焦った顔をして起きた。

「…また…。」

詩雅野は時計を見た。

時刻…5：00――。

「…はあ…。」

気持ちが不安定な時いつもあんな夢を見てしまう…。

「…存在価値…。」

トントントン

ガチャッ

詩雅野の部屋に誰かが入ってくる。

「…詩雅野。おきてたのか？」

「静…さんは早いんだ。」

「別に。飯できてるぞ。」

「ねえ。」

「ん？」

「このアパートって皆住んでるの？」

「住んでるけど、なんだ？」

「いや…別に。」

二人は台所に向かう。
詩雅野は椅子に座る。

「……。」

「どうかしたのか？」

「なぜだ？」

「昨日と違って、何かしょんぼりしてるからな。」

「別に……。」

「変な奴だな。」

「あんたもだろ……。」

「ほら。」

「？……なんだこれ？」

詩雅野の目の前には、目玉焼きと食パンが出てきた。

「はぁ？お前目玉焼きと食パンを知らないのか？」

「知らないも何も……食べた事も見たこともないぞ？」

「お前……一体何食ってたんだよ？」

「……分からない……。」

詩雅野は暗い顔をした。

「何で？」

「僕には、記憶がない。ただ名前と死にたいという気持ちしか知らない。」

「……はぁ……いいからさっさと食べるよ。学校行くからな。」

「……学校……？まあい。」

詩雅野は食べ始める。

「うわぁ……お前喰い方がやばいな。」

「んぁ？何がだ？」

「はぁ……ほら、いっぱいいついてるぞ。」

タオルで詩雅野の口の周りを拭く。

「……？……。」

詩雅野はぼかんとした顔をした。

「面倒だ。」

「はぁ…もうこっち来い！」

「なんだ？」

静は詩雅野のネクタイを結ぶ。

「お前、何も出来ないのか？」

「分からない…だが、家族はいないと分かる。」

「なんだよ、それ。早く行くぞ！」

「…分かっている。」

ガチャッ

二人は家から出る。

「あっ！静！おはよう！」ニッコッ

「おう。麗」

「……。」

詩雅野は急に黙り込む。

「詩雅野？」

「…はぁ…。」

コケッ！

「！？…うわぁ！」

「詩雅野！」

詩雅野は階段から滑り落ちる。

ドンッ！ガタッ！

静と詩雅野が階段から落ちた。

「大丈夫！二人とも！」

麗が慌てて二人に駆け寄る。

「痛ッ…大丈夫か？詩雅野？」

「……。」

詩雅野は起き上がる。

「…大丈夫?…。」

「って、お前こそ大丈夫か?」

「あっ…うん。」

「そうだ。私は麗。小室麗こむろれいよろしくね」ニッコ

「…。」

「早く、行くか。」

三人は学校に向かった。

麗は静に話しかけているが、静はあんまり聞いていない。

詩雅野はどこかをずっと見ていた。

そして、学校。

「キヤアアア!!可愛い!」

「転入生の白夜詩雅野君だ。仲良くしてあげるよ。」

「……。」

詩雅野は無口だった。誰とも喋らず。

「存在価値などない…ヴァンパイアなんて…死ぬしか道はない…。」
ボソッ

#3 同居・花園

【詩雅野、ありがとう。私とっても嬉しいよ。詩雅野がいてくれるだけで！】ニコッ

お前も所詮は僕の物じゃ無い…。

「おい！白夜！白夜！起きろ！」
ハッ！

「！？。。」

先生が詩雅野を起した。

「どうした？顔色悪いぞ？」

「…あつ、大丈夫つす。」

「そうか？なら黒板の問題を解いてみる。」

「…x - 8。」

「正解。」

詩雅野は窓から空を見上げていた。

人間は…自由でうらやましい…。

「詩雅野！おい。」

「ん？。。」

詩雅野は目を覚ます。

「お前な、弁当は？」

「飯？…ふわぁ…眠いからいらない…。」

「いいから、来い。」

詩雅野は静に連れ去られる。

廊下を歩くと。

「キヤアアア！静先輩と詩雅野君だ！！あの二人仲いいのかな？？」
えらく注目されている。

「あつ！静！と詩雅野君。一緒にご飯食べよう」ニコッ

「おう。」

「。。。」

薔薇一面に咲く、場所に来た。

ドクンッ！

「！？。。」

「詩雅野？」

詩雅野の様子がおかしかった。

「。。。薔薇。。」

【詩雅野、薔薇の花言葉は”愛情”。私が詩雅野に愛情を注ぐからね】ニコッ

「。。。ハア。。。ハア。。。ハア。。」

「詩雅野？」

「愛情。。。薔薇。。。存在価値。。。」

僕はなんだ？。。。お前は誰だ！。。。。

【詩雅野！】ニコッ

お前は誰なんだ！！！！

『好きよ、詩雅野』

ハッ！

「!?!?…うわあああああああ!?!?!?!」

「詩雅野?」

詩雅野が頭を抱え、大声をあげる。

「ハア…ハア…ハア…」

バタンツ!

詩雅野が倒れる。

「おい! 詩雅野!」

「どうなんだ?」

「感情が高ぶっただけかもねしれないよ」ニコッ

「そうか…」

「珍しいね、静が心配するなんて。」

「うつせよ。」

霎と静は結構仲がいいのかもしれない。

詩雅野はベッドで眠っていた。

「じゃあ静、この約束は守ってね。」

「??」

霎が言う。

「一つ、詩雅野君をあまり、女の子に近づけない。

二つ、詩雅野君をあまり、外出させない。

三つ、詩雅野君にあまり、花とか花園には行かせない、近づけない。

これは守ってね!」

「…分かった。」

「う…ハア…ハア…」

詩雅野はうなされていた。

「詩雅野…。」

「そばにいてあげなさいな。」

「あつ…おう。」

静は詩雅野の前にある、椅子に座る。

「あつ、メイドさんー兎さん。」

雲が兎の帽子をかぶっている少年とメイド服を着ている少女に声をかける。

「兎って言うな!」

「なんですか?」

「ちよいと、仕事してくれない?」ニコッ

「いいぜ。」

「かしこまりました。」

#4 同居・双子（前書き）

なぜか、私の小説は双子が多いなあ〜ww
本人、双子LOVEですねww

#4 同居・双子

「お兄様、新しい方はどんな方なのでしょう？」

「兎が知るわけないだろうが。」

「そうでございますか。」

「だが、依頼を受けたからには、やるしかないか。」

「そうでございますね」ニコッ

「さっさと行くぞ。」

「かしこまりました。主。」

二人は歩く。

「う…う…ハア…。」

「…。」

ガラッ

「静、私行くけど、休む？」

「あ…行く。遅刻するって言うてくれ。」

「了解」ニコッ

「頼んだ。」

麗は部屋から出て行った。

『詩雅野は、カッコイイよ。私を守ってね。詩雅野』ニコッ

ハッ！

「！？…。」

詩雅野は目を覚ました。

部屋には詩雅野一人だった。

ガラッ

「…。」

「ご主人様、お茶をお持ちしました」ニコッ

一人のメイドの服を着た、少女が紅茶を机に置く。

「???。」

カタンッ！

「?!…。」

そして、一人の兎の帽子をかぶった少年が詩雅野の前にある椅子に座る。

「うさぎは、衣織白兎。」

「私は、衣織白葉と申します。」

「……。」

「お前に話がある。」

「…。」

白兎が微笑んて言う。

「お前、未来が見えるんだよな？」

「あつ…うん。」

「なら、ちよつと来い！」

グイッ！

「?!…ちよッ!…。」

白兎は詩雅野の手を引っ張る。

「主。詩雅野様は病人ですが、よろしいのですか？」

「別に、いいだろう？うさぎにだって依頼なんだしな。」

「かしこまりました。」

「あつ…おい！」

白兎と白葉は詩雅野を連れて、窓から飛び降りる。

「さつさと、依頼終わらせて、うさぎは寝る。」

「そうでございますね。主。」

「……。」

なんだ…こいつら…。

「…。」

「静！一緒に帰ろう」「ニコッ

「おう。」

静の携帯がなった。

「はい？」

『静！まずい！』

「霽？どうかしたのか？」

『詩雅野君がいなくなったの！』

「何？！…。」

『いいから、詩雅野君を探して！お願い！』

「了解！」

静は電話を切った。

「どうかしたの？」

「詩雅野がいなくなった！」

「えっ？！…私も探すよ！」

「おう！見つけたら、電話くれ！」

「うん！任せて！」ニコッ

静と麗は詩雅野を探した。

「…で、何するの？」

「この依頼者の未来を見てほしいのだが。」

「…。」

詩雅野の目の前には一人の少女が居た。

「何で？…。」

「今回の依頼は依頼者の未来を見てくれとの依頼だからな。」

「…しょうがない…」
詩雅野は少女に触れた。

「好きだよ」「ニコッ」
「俺も、これからも一緒に居ような。」
「うん!」「ニコッ」

「…。」
「どうだ?」
「告白されてた…。」
「そうか。」
「……。」
「主。依頼は完了しました。帰りましょう。」
「そうだな。よし帰るぞ!」
「なっ?!…。」
白兔が詩雅野を担ぐ。

さっきの未来…僕には無縁の未来だ…。

#4 同居・双子（後書き）

アドバイスなどがあれば、ください。
お願いします！！

#5 同居・精霊使い（前書き）

今回は精霊使いの少女です。

#5 同居・精霊使い

タツ！

「うわぁ！？」

ズズズ！

「大丈夫か？詩雅野？」

「あつ…うん。」

詩雅野はとつても嫌な顔をする。

「うさぎは優しくしたぞ。」

「……。」

白兎は詩雅野を下ろす。

ガラッ！

「詩雅野！」

「…静さん！」

「お前等、勝手に詩雅野を連れまわすなよ。

連れまわすならメールか電話しろ！」

「はいはい。帰るぞ白葉。」

「はい。主。」

二人は去って行った。

「なんだっただ？…。」

「詩雅野も、あんまりああい奴についていくなよ！」

「…僕は子供じゃない！」

「詩雅野？…。」

「もういい。僕は先に部屋に戻るからな！」

「はいはい。」

詩雅野は部屋に戻った。

タツ
タツ

「血を吸う者の匂いがする…。」
ヴァンパイア

ドクンッ！

「！？…ハア…ハア…ハア…。」

夜はいつも、詩雅野は起きる。

「…ハア…ハア…夢…。」

いつも、一緒の夢…。

ガチャッ

誰かが、部屋に入ってきた。

「！？…。」

詩雅野は恐る恐る、静かに動く。

「空黄…。」
そらぎ

ガッ！！

「？！…。」

詩雅野が壁に吹き飛ばされる。

「ガハッ！…。」

「居た…。」

「！？…。」

詩雅野の目の前には、一人の少女が立つ。

なぜだ…何も無いのに…。

「未来は見えないの？…。」

「！？…。」

「君の未来は全て、自分じゃない。他人だけの未来が見えるだけなんだよ…。」

「!?!?。」

「応えて、ヴァンパイア。」

「?!?!?。」

「追手!?!? まさか、こんな所まで来るのか?!?。」

「……。」

「ヴァンパイア?!?。」

「パチッ!

」部屋の電気がついた。

「しーちゃん。」

「闇香、何してんだよ。」

「……はあ?。」

「二人は知り合いらしい。」

「こいつは、黒咲くろさき闇香。」

「さつきはごめん……炎舞が勘違いで間違えた。」

「何をだ?。」

「生き残ったヴァンパイア。」

「?!?!?。」

「なんだ、それ?。」

「闇香は立った。」

「また、明日。皆の前で話す。」

「そうか? 分かった。今日は寝ろよ。」

「うん。お休みしーちゃん。」

「お休み。」

「そして、部屋のドアが閉まった。」

「詩雅野? どうかしたか?。」

「いや……別に。もう寝る。」

「おう。」

詩雅野は寝転ぶ。

僕は…狙われているのか？…。

#6 同居・情報

朝の光が、詩雅野に差し込む。

「…ん？…朝か…。」

夢は見なかった…落ち着いていたのか？…。

「ふわあ…ん？」

詩雅野は食堂に行く。

アパートでも、食堂やら屋上やら何かいっぱいあるらしい。

「詩雅野君！おはようー！」ニコッ

麗が詩雅野に微笑む。

「…おはよう…。」

「…昨日の少年だ。」

「詩雅野か。おはよう。」

「詩雅野君、おはよう。よく寝れた？」

「…：…そんなに一気に言われても応えれない。」

詩雅野は椅子に座りながら言う。

「で、昨日。俺の部屋で言ってた事は？」

静が闇香を見る。

「…精霊から聞いた話だよ。」

「お前の精霊は情報が早いな。」

「大事な話になって思っ、皆呼んだよお」ニコッ

霏は笑顔で言う。

「皆っ…はあ…。」

静は頭を抱える。

「詩雅野！…！」

「うわあ？！…」

「!?!?。」

白兎が後ろから詩雅野に抱きつく。

「皆さん、ご無沙汰しております」「ニコッ

「あつ…うさうさとはくはく!」

「そんな名前で呼ぶな!」

闇香はなぜかテンションが高かった。

「まったく、いつ見てもうるさい連中ですね。」

「閃は嫌い?」

「苦手なだけですよ。」

二人の少年少女が来た。

少女の名前は『ちよつかけきくほたる蝶影菊蛸』

少年の名前は『あかみどりせんけん赤緑閃剣』

「つて、早く席についてね。」「ニコッ

雲が皆に指示する。

「と、それじゃ、席に着いた所で闇香ちゃん、説明お願い」「ニコッ

「…了解。」

闇香は真ん中に座る。

「今、この世界中で、ヴァンパイアの生き残りを探してる。」

「ヴァンパイア?そんなのいるのか?」

白兎がお茶を飲みながら言う。

「最後まで聞いて、それから質問してよ。うさうさ。」

「だから!うさうさじゃねえーよ!」

「はいはい。」

静がケンカを沈める。

「その、ヴァンパイアの生き残りを探して、見つけ出したら、報酬
がもらえるらしい。」

「!?!?。」

「報酬?…なんで?」

「滅多にいないんだって、ヴァンパイア。しかも生き残りだから、一人らしいよ。」

「一人ですか…今も探してるんですか？」

「うん。殺し屋やマフィアとかはもう探し始めてる。」

「へえ…。」

皆いろいろ考え始める。

「そのヴァンパイア、何回か、見つかって捕らえられたけど、脱出したって話よ。」

「ふ〜ん…やるな。」

「そんな、ヴァンパイアがいるなら僕は見て見たいですよ。」
閃剣が言う。

「特徴とか無いわけ？」

「特徴？…えつとね…左目に傷跡が合って、首から背中にいれずみがあるらしいよ。」

「そんな奴、絶対あやしいだろう？」

白兔が言う。

「！？…。」

詩雅野は酷く動揺していた。

「詩雅野？」

ビクッ！

「?!…。」

「詩雅野？どうかしたのか？」

静が詩雅野を見る。

「…なんでもない…悪い、僕少し外の空気を吸ってくる。」

「あつ！詩雅野！」

詩雅野は外に出て行った。

「どうしたんですか？あの人。」

「さあ…。」

「…。」

「ちよつと、俺行つて来る。」

「あつうさうさ!」

白兔が詩雅野を追った。

「ハア…ハア…ハア。」

パシッ!

「!?!?。」

誰かが詩雅野の手をつかんだ。

「ハア…詩雅野、どこまで行くんだよ。」

「…白兔…さん。」

「さんは要らん。」

「…うん。」

「雨降つてるのに、風邪引くぞ。」

「…白兔こそ、引く。」

「別に、俺はバカだからな」ニコッ

「……。」

詩雅野は暗い顔をする。

「お前…何か隠してるのか?」

「えっ?…。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4316y/>

赤の破壊者

2011年11月20日04時11分発行